

平成29年度実践的安全教育総合支援事業成果報告書

学校名：岩手県立盛岡第二高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

- (1) 防災教育・訓練手法等の開発・普及
東日本大震災の教訓を踏まえた避難訓練や被災地学習等を行い、生徒が自然災害に対して、自他の命を守り抜くために、危険を予測・回避する力や「主体的に行動する態度」の育成を図る。
- (2) ボランティア活動の推進・支援
ボランティア活動を通じて災害を肌で感じ、深く考える機会をつくり、岩手の高校生として何ができるかについて考え、自ら行動できる生徒を育てる。

ウ 救急法講習会

【期 日】3月7日（火）

【参加者】1 学年生徒

【内 容】AEDを用いた心肺蘇生法の習得

**II 取組の概要**

- (1) 防災教育・訓練手法等の開発・普及
ア 盛岡市シェイクアウト訓練
【期 日】9月1日（木）「防災の日」
【参加者】全校生徒・教職員
【内 容】地震時における自らの身を守るための一斉訓練



イ 実践的防火避難訓練

【期 日】10月2日（月）

【参加者】全校生徒・教職員

【内 容】地震後の火災を想定した防火扉くぐり戸を使用した避難訓練



(2) ボランティア体験活動の推進・支援

- ア 滝沢市社会福祉協議会「NPO法人いなほ」、一般社団法人「子どもエンパワメントいわて」学習支援ボランティア釜石小佐野地区「学びの部屋」の子どもたちへ

【期 日】12月25日（月）1月9日（火）

【参加者】華道部

【内 容】手作り花ろうそくプレゼント



イ 被災地学習（陸前高田・大船渡・気仙沼）

【期 日】10月24日（火）

【参加者】1 学年生徒 186 名・引率 10 名

【内 容】①陸前高田コース

語り部ガイド、職業講話、市役所講話

②大船渡コース

語り部ガイド、まちづくり学習

③気仙沼コース

語り部ガイド、漁業・観光学習、魚市場見学

《 被災地学習 学習内容 》

一般社団法人マルゴト陸前高田様をはじめ、陸前高田市、大船渡市、気仙沼市の皆様のご協力のもと、現地での学習を3コース設定し、実施した。

1. 事前学習

現地から提供していただいた資料や、県立図書館所蔵の資料などをもとに、震災の概要を学んだ。また、被災当時、沿岸の高校で勤務していた本校職員の経験談を聞き、理解を深めた。

2. 現地学習

(1) 陸前高田コース

【学習内容】

①語り部ガイド

震災遺構として保存されている「旧気仙中学校」や「旧道の駅高田松原」(タピック45)のほか、8階建ての災害公営住宅や、かさ上げ造成中の市街地などを見学しつつ、説明をいただいた。また、旧道の駅のそばにある東日本大震災追悼施設では、黙祷を捧げた。

②職業講話(陸前高田グローバルキャンパス)

以下から2つ選択し、受講した。

- ・教育(教育相談員 吉家さん)
- ・福祉(一般社団法人ドリームプロジェクト 関さん)
- ・農業(株式会社スリーピークス 及川さん)
- ・まちづくり(一般社団法人SAVE TAKATA 吉田さん)

③市役所講話(陸前高田グローバルキャンパス)

復興計画や今後の課題について、陸前高田市の都市計画担当の方から説明をいただいた。

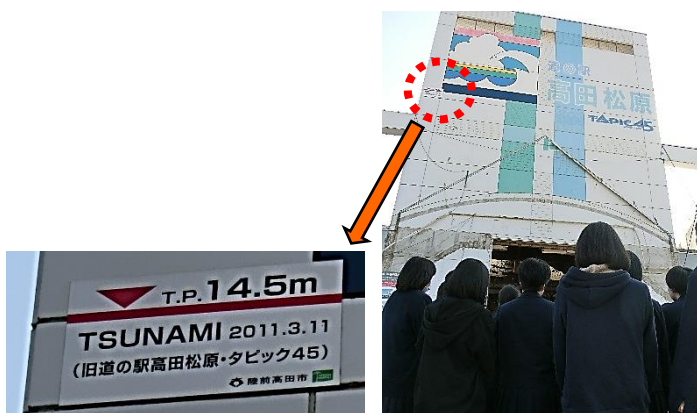
【参加生徒の感想】

A組生徒 陸前高田はまだまだ復興が進んでいないと感じた。ただ、今回お話を伺った人は、みな前を向き、未来のまちを想像し、創造しようとしている。ではなぜ復興が進んでいないのか。それは“心の風化”が関係しているのだと思う。私は今まで震災の復興について考えていたつもりであった。しかし、同じ岩手県に住んでいる私でさえ、知らないことが数多くあった。語り部さんが言っていた言葉で『私のまちは大丈夫だ』という気持ちがこの大震災につながった』という言葉はとても納得できた。

今回の被災地学習で、私は自分の視野の狭さを実感した。教員を目指しているが、身近な大学や教員の仕事など、目に見えていることだけを考えていた。しかし、今回まちづくりについての話を聞き、教育をする人がまちといかに深く関わりをもっていくか、そしてどのように保護者との関わりをもつか、たくさんの方から情報を得ていく必要があると思った。そして、教員となり震災を次の世代へ教えていく存在になりたいと思った。



語り部ガイドの實吉さんは、発災直前まで道の駅にいたとのこと。



「旧道の駅高田松原」(タピック45)にて当時の状況を伺う。



高田一中の元校長の吉家さんは、発災当時、津波が押し寄せた広田中の校長を務めていた。

C組生徒 私がガイドの方の話を聞いて驚いたことは、今まで法律を守って信号を待っていた車の運転手たちが、津波がすぐそばまで来たことを知った瞬間に、走って避難している人々をひきながら逃げようとしていたという話で、とても胸が痛くなった。このような状況では、誰もがパニック状態に陥ってしまうからこそ、日頃から津波が来た場合どのように逃げるか、また道路状況など様々なことに備えておく必要があるのではないかと思った。

震災を機に、ハンディキャップをもった人が普通の人と隔たりのない生活をし、地位や障がいの差のない、心のバリアフリー化がどんどん広まり、同じ人間として偏見をもたずに、たくさんの人々と一緒に活動できる幅を広げていきたいと思った。少しでも早く、陸前高田が元のように活気づき、ノーマライゼーションという言葉がいらぬ町になるよう、私も陸前高田の今後の課題について、一緒に考えていきたい。

D組生徒 たくさんの方々のお話を聞いて、復興に向けて確実に行動を起こしている人がたくさん存在することを知りました。特に印象に残ったのは、NPO法人の「SAVE TAKATA」の皆さんでした。最初は「何でも屋」で始まったボランティアが、農業や若者事業、ICT事業、地域事業などの分野にしぼって、地域の方々に寄り添った活動をしていました。その活動の中心になっているのは、陸前高田市出身で一度地元を離れた人ばかりでした。この震災を受けて、地元に残って復興を支援したいという若者が増えたそうです。私も、そういう地元に対する姿勢を見習いたいと思いました。そして、同じ岩手県民として、自分ができることは何だろうということを常に考えて、これから先を生きていきたいと思いました。

(2) 大船渡コース

【学習内容】

①語り部ガイド

現地で津波の高さを示していただいたり、現在竣工中の工事の様子を見ながら、説明を受けた。また、まちのジオラマや映像、震災に関わる模型やパネルの説明もいただいた。魚市場では、実際の競りの放送を聞いたり、水揚げされる魚を見ることができた。

②まちづくり学習（キャッセン大船渡）

キャッセン大船渡のまちづくりの取り組みを大船渡市の災害復興局の方から伺った。その後、大船渡駅周辺のまちの様子を見学した。被災後、修繕を行い、災害危険区域で営業していたホテルがあったが、津波復興拠点整備事業の中で、取り壊してまた建てられることになったと聞き、大がかりな工事でも安全を最優先に考慮していることを学んだ。また、キャッセン大

船渡に出店している店主の方々からヒアリングを行った。出店までの経緯や今後の展望などを伺い、様々な工夫を重ね、絶えず挑戦し続けていることを学んだ。



当時、住民が逃げた加茂神社へ、階段を使って登る。石段は119段。結構な急勾配であった。



キャッセン大船渡での聞き取りの様子。キャッセン大船渡は、今年度の日本都市計画家協会主催「全国まちづくり会議」において、「日本まちづくり大賞」（最優秀賞）を受賞した。

【参加生徒の感想】

B組生徒 語り部の熊谷さんが、3つの「助」が大切と言っていました。それは「自助」「共助」「公助」です。「自助」とは自分自身の身は自分で守ること、「共助」とは共に友達などを助け合うこと、「公助」とは政府や行政の援助を受けて助かることです。このことは沿岸地域だけでなく、内陸で生活している私たちにとっても大切なことだと思いました。

また、大船渡市役所の方が、「まちは欲を満たす場」とおっしゃっていました。不満が欲に変わり、欲を満たす人が必要になり、達成を導いていくことで、皆さんのチャレンジや検証が必要になります。そのチャレンジや検証から得たものを大切にすることが必要だと思いました。

(3) 気仙沼コース

【学習内容】

①語り部ガイド

高さ7メートルを超える防潮堤、旧気仙沼向洋高校、街の様子を見ながら、当時の様子や現在の復興の様子を伺った。

②気仙沼の漁業に関する学習、見学（気仙沼市魚市場）

DVDをみながら気仙沼の鰹の一本釣りの様子や様々な漁の仕方について学んだ。また、生産量日本一である

フカヒレのお話、漁師の減少の問題について伺った。実際に入札が行われる市場を見学することもできた。

③観光と復興に関する学習（海の市）

気仙沼市観光コンベンション協会の方の案内の元、物産店を見学した。また、震災後、観光の立場から復興のために何ができるのか考え、どのような行動に移したかを伺うことができた。

※気仙沼コースでは、海浜清掃ボランティアを計画していたが、直前の台風の影響のため、中止となった。



旧気仙沼向洋高校。写真右は体育館の骨組みである。跡形もない。



フカヒレはサメの尾の部分を使用しており、皮をむいて処理をすると元の大きさの半分以下になるが、高値で取引されるとのこと。

【参加生徒の感想】

B組生徒 気仙沼に行ってみて、テレビとか新聞で見たときより復興はしていたものの、やはり震災の時の傷跡は残っているのだと思いました。私は、震災が起きてから沿岸地域には行ったことがなくて、今回初めて行って見て、津波の威力の大きさや悲惨さを今まで以上に強く感じました。3.11の時、私たちが住んでいる内陸では大きな地震が起きましたが、沿岸では、津波を想定して作っていた堤防をも超える大津波が来てしまいました。これは、私たち内陸の人も含めて危機意識が足りなかったのだと思いました。これからは次の災害に備えて、災害への知識を身につけること、灯りや水を常備しておくこと、災害時をイメージしておくことなどが大切だと思いました。気仙沼は悲しいところだけではなくて、漁業がとても盛んなところで、21年間カツオの水揚げ量日本一、国内のサメの水揚げ量のうち9割が気仙沼など、新たな一面を知ることができました。今回の学習を通して、“普通が幸せ”ということがよく分かりました。何事も起きないいつも通

りの生活に感謝しながら、生きることに感謝して毎日を送っていかうと思いました。

E組生徒 私は、祖母やいとこの家が宮城県にあって、津波の被害に遭いました。数か月经ってからその場に行ってみましたが、昔の面影は1つもなくて、驚いたのを今でも覚えています。気仙沼は黒潮と親潮がぶつかるところで、魚がよく獲れるとのことでした。漁業に携わる人の中には3時間も中腰で作業をしている人がいると聞いて、大変だと思いました。そういう方々が気仙沼を支えているのだと思いました。語り部の方から、その場にいた人しか分からない話をさせていただきました。気仙沼は津波の後に火災が発生し、火の海になったそうです。津波の被害にあった学校は、まだ窓ガラスが割れたままになっていました。震災のすさまじさを伝えているようでした。今回の被災地学習で、現地に行って、これまでのことやこれからのことを知ることができたので良かったです。震災のことをこれから先の未来を生きる人達にも伝えていきたいと思いました。

3. 事後学習

現地で学んだことを踏まえ、コースごとに課題の解決策を検討し、意見交換を行った。それをもとに、クラス内発表会を実施し、情報の共有と知識・理解の深化を図った。



各コースで検討したことをもとに、要点をフリップにまとめ、クラス内で発表した。

III 取り組みの成果と課題

(1) 成果

防災教育や被災地での学習を通じて、災害の危険に際して、自らの命を守り抜くために「主体的に行動する態度」の育成や、安全で安心な社会づくりに貢献する意識の向上につながった。

(2) 課題

地域防災を支える人作りを推進するために、主体的意欲を引き出しつつ、防災教育への継続的かつ組織的な指導を行う必要がある。